

# 継子

夢野久作

青空文庫



どこか遠くで一つか二つか鳴るボンボン時計の音を聞くと、睡ねむられずにいた玲子はソツと起上った。

屋根裏の窓に引つかかっている春の夜の黄色い片かたわれ割月を見上げながら、洗い晒さらしの綿ネルの单衣ひとえ一枚に細帯を一つ締めて、三階の物置の片隅に敷いてある薄ツペラな寢床から脱け出した。鼻はしごだをつま抓まれてもわからない暗黒の中を素跣すはだし足の手探りに狭い梯子段はしごだを二階のサロンに降りて来た。

……この頃来なくなっている玲子の家庭教師の大学生、中林哲五郎先生に昨日きのうの昼間、速達で出した手紙の文句を思い出しながら……。

中林先生。早く玲子を助けに来て下さい。

今のお母さんが去年の十二月にいらつして、先生が私の家うちに来て下さらなくなってからというもの玲子は泣いてばかりおりますの。先生がよく玲子にお話して聞かして下さった西洋の探偵小説とソツクリの怖い怖い悲しい悲しいことばかりが玲子の家の中一パイに渦巻いております。

去年からコカイン中毒になつて弱つておいでになつたお父様が、二三日前に急に思い立つて信州へ鳥の研究にお出かけになつてからというもの、そんな怖い悲しいことが急に私のまわりすきに殖えて来ました。ですけども詳しいことは書いてある隙が

りません。

玲子の家うちに泥棒が這入はいりそうなのです。そうしてお母様を殺し  
そうなのです。私どうかしてお母様を助けてあげたくてしようが  
ありませんけど、とても怖くて怖くてそんなことが出来そうに  
ありません。

今朝けさ、学校に行きがけに怖い顔をしたルンペンの小父おじさんか  
ら手紙を一通ことづかりました。お父様の所番地にいる根高弓  
子という女の人のアテナになっております。それを誰にもわか  
らないように、お前のお母さんに渡せ……うまく渡さないとお  
前は、お母さんに殺されてしまうぞって言って怖い顔をして睨  
まれました。

うちのお母様は根高弓子なんていいません。大沢竜子っていうのですから、あたしどうしようかと思つて、休みの時間に手紙をいじりまわしておりますといつの間にか封筒の下の方の糊が離れて中味が脱け出して来ましたの。そうして悪いことはわかつていたのですけど、あんまり心配ですから玲子はその手紙の中味を読んでしまいましたの。

玲子はビツクリしてしまいました。そうして十二時の休みの時間に大急ぎでこの手紙を書きました。お友達からお金を借りにて速達で出します。

そのルンペンの小父さんおじから貰つた手紙には先生からお話に聞いた探偵実話ソツクリの怖い怖いことが書いてありました。

玲子の今のお母様のズツト前のお婿さんが北海道の監獄から逃げ出して来て、久し振りにお母さんに出す手紙なのでした。

中林先生。あたし、どうしたらいいのでしょうか。どうぞどうぞ直ぐにいらっして下さい。玲子にどうしたらいいか教えて下さい。かしこ。

三月二十二日

大沢玲子より

中林先生様 御許に

……梯子段はしごだんが二度ばかりギシギシと音を立てた……玲子はハツと吾に返つて立止まったが、それでもサロンに來ると、敷き詰めてある豪華な支那絨じゆうたん氈たんのために足音が消されてしまったの

で、玲子はホツと安心した。今一度、真向うの仏蘭西窓フランスの下側にコビリついている黄色い片割月を見上げたが、そのまま小さい身からだとお河童かっぱさんを傾かしげながら白いマットを敷いた幅広い階段を小急ぎに降りて行つた。

巨大な旧式洋館の大沢子爵邸内の春の夜はヒツソリ閑かんと静まり返つて、階下玄関の大グランド時計ドファザーのユツクリユツクリとした振子の音が冴え返つていた。

玲子はその時計の針を見ようとしたが、近寄れば近寄るほど背が低くなつて駄目なことがわかつたので、思いきつてその時計の横のスイッチを捻ひねつて、白い文字板の二時十分を指している長針と短針をチラリと見ると直ぐにまた、消してしまった。するとそ



の時に二階の階段の上から、足音を忍ばして降りて来かかった派手な波<sup>ペルシヤ</sup>ス模様の寝間着の裾と、白い、しなやかな素足の爪先がヒラヒラと、慌てて二階の方へ逃げ上って行つたが、しかし時計の方に気を取られていた玲子はチツトモ気づかなかつた。またも手探りで中庭に向つている廊下の途中にある小さな切戸<sup>きりど</sup>の処へ来ると、その低い扉<sup>ドア</sup>の中央にある小さな覗き窓にお河童<sup>かっぱ</sup>さんの額を押しつけて青白い外の月夜を覗いた。そのままじつと動かなくなつた。

その覗き窓の直ぐ下に大きなペンキ塗の犬小舎の屋根が月あかりに見えていた。それはズツト前のこと、大沢家に泥棒<sup>はい</sup>が這入りかけたのを調べに来た刑事さんが「ここが一番物騒ですよ」と言

つたので、玲子の父親の大沢子爵が、友人の村田大将から貰つて来た黒竜アムール江生れのセパードを繋いでいる小舎であつた。そのセパードはアムールといつてステキに大きい、人懐ひとなつこい犬で、その中でも玲子と、玲子の先生の中林哲五郎には特別によく懐なついてるのであつた。

しかしその時に玲子は別段にアムールの名を呼ぼうとはしなかつた。ただ一心にその犬小舎の周囲を取巻く軒下の暗闇を見守つているきりであつた。二時半を打つても三時を打つても……片割月が西側の森に隠れて、そこいらがすこし暗くなりかけても、一心に窓際に掴まっていた。そうして東の空が、ほのぼのと明けかかつて来ると、玲子はほっとタメ息を一つして廊下を引返して玄

関に出た。足音を忍ばしてまだ真暗な二階のサロンへ上つて来た。

ところが玲子が三階の物置へ通ずる狭い板梯子へ片足を踏みかけようとした時に、サロンの天井に吊された美事なキリコ硝子のシャンデリアがパツと輝き出したので、玲子は思わずハツと身を縮めたまま背後を振り返った。あんまり急に明るくなつたので眼をパチパチさせてみたが暫くは何も見えなかつた。玲子は梯子段に片足を踏みかけて振り返つたまま石のように固くなつてしまった。

「あら……お母様……」

サロンの片隅の寝室に通ずるカーテンの蔭から美しい婦人の姿が徐々に現われた。それは三十四五かと見える前髪を縮らした美しいマダムで、全身が刺青いれずみのように青光りする波ペルシャス模様の派

手な寝間着を着た、石竹色のしなやかな素足に、これも贅沢な刺繡のスリッパを穿いていたが、その顔は大理石を彫きざんだように真白く硬こわばって、大きな美しい二つの瞳には真黒い怒りがみちみちていた。

「何をしていますのです」

その声は低くて力があつた。小柄な、瘡やせこけた、見すばらしい姿の玲子は、たださえ色の悪い顔色を一層、青白く戦おのかしながらマダムの方へ向き直って、赤茶気たお河童かっぱさんをうなだれた。校長先生の前に呼出された時のように……。

「……はい……」

「はいではありません。子供の癖に真夜中に起きて家うちの中をノソ

ノソ歩きまわるなんて……何て大胆な……恐ろしい娘こでしょう……」

マダムの口調は憎しみにみちみちていた。玲子はモウぽとりぽとりと涙を滴たらしながら普通たさえ狭い肩をすぼめて、わなわなと震えていた。

「はい……あの……あの……泥棒が……」

「……泥棒……何が泥棒です……」

「あの……あの……このごろ……アムールが御飯を食べなくなり  
ましたので……」

マダムの薄い唇に冷笑が浮かんだ。

「ほほほ。利いた風なことを言うものではありません。泥棒が家うち

の犬を手馴なずけるために何か喰くべ物でも遣やつていると言うのですか」

「……………」

「ハツキリ返事をなさい」

「…………ハ…………ハ…………」

「何がハイです。うちのアムールは、そんなに手軽く他所よその人に  
馴染なむような馬鹿犬ではありません。それとも誰か怪あやしい者がこ  
の家うちを狙ねっている証拠でもありますか」

「……………」

「ハツキリ返事をなさい」

「ハイ…………ハ…………ハ…………」

「あると言うのですか」

「……………」

「あなたは……どうしてソナにしぶといのですか」

そういううちにマダムの背後うしろに隠れていた白い肉付きのいい右手が前に出て来た。その手には黒い、短い、皮なめしがわ革むちの鞭むちがシナシナと撓しなっていた。

玲子は、それを見るなりグツタリと力を失ってしまった。今にも気絶しそうに左手の柱に掴まると、右手で懐中から一通の封筒を取出してマダムの方向へ差出した。ガツクリとうなだれて涙をハラハラと流しながら……。

その封筒の文字を、遠くから一目見ると、マダムはハツと顔色

を変えた。しかし又すぐに何も知らぬ白々しい顔になって冷笑した。

「ホホホ。神経過敏にも程があるわねえ、この児こは……何です……見せて御覧なさい」

といううちにツカツカと近寄って来てその手紙を引たくつて無造作に封を破った。中味を拡げるとシャンデリアの方向に向けて読み初めた。

玲子は今にも鞭が降り落ちて来るかのように、その前にペタリと坐つて両手で顔を蔽うた。

「ホホホ。この手紙がどうしたんですか……何ですつて……『弓子、久し振りだなあ、よもや忘れはしまい。俺は十五年前に別れ



たお前の夫、沼霧<sup>ぬまぎり</sup>匡作<sup>きやうさく</sup>だ』……ホホ……何だか時代めいたお芝居みたいねえ。この弓子<sup>ゆまこ</sup>つて誰なの……え……玲子<sup>れいこ</sup>さん……お前さん、知っている人なの？……」

「……………」

「どうやらお前さんの知っている人らしいわねえ。こんな手紙を持っていると場所を見ると……ええ……と……『俺はお前のために俺の旧悪を密告されて、網走<sup>あぼしり</sup>の監獄に十五年の刑期を喰<sup>くら</sup>込<sup>こ</sup>んだ。おまけに財産の全部をお前に持逃げされてしまった』……まあ恐ろしい女ですわねえ弓子<sup>ゆまこ</sup>つていうのは……ねえ玲子<sup>れいこ</sup>さん……」

…」

「……………」

「ええと……『それでも俺はお前を怨まなかつた。こうして苦心  
惨憺して三年前に脱獄してからというもの、それこそ生命を削る  
いのち 削る  
思いをして、お前を探しまわったことを考えても、お前なしに俺  
が生きてゆけない人間になりきっていることが、いくらかわかる  
だろう』……ホホホ。いよいよ安芝居のセリフじみて来たわねえ  
……『それにしてもお前はこの十五年の間に立派な悪党になつた  
なあ。たつた三人ではあつたが東京の岡田子爵、越後の甘粕少  
あまかす 粕少  
将、京都の林男爵と、世間知らずの金持華族や、軍人上りの富豪  
なぞと次から次に結婚して、みんなお前のお得意のコカインの中  
毒患者にして次から次に自殺みたいな死に方をさせてしまった。  
そうしてソナ連中の遺産を一人で掻き集めて栄耀えいよう栄華えいがにふけ

りながら、よく、尻尾しつぽを押えられずに来られたもんだなあ、お前は……』……まあ怖い……そんなことがホントに出来るのかしら……。第一コカインなんてどこの薬屋でもお医者以外には決して売らないのに……『しかしお前がドンナに悪智恵の逞ましい毒婦であつても、俺が出て来たらモウ駄目だぞ。俺は根高弓子というお前の真ほんとう実の名前から生れ故郷の両親の顔まで知っているのだ。東京の岡田雪子、新潟の甘粕花子、京都の林百合子という三つの変名も、今のお前の変名と一緒に知っているんだ。東京と、新潟と、京都の警察が、今でも雪子、花子、百合子の名前を聞くとピインと耳を立てるに違いないことを、お前自身もよく知っているだろう。俺がお前の今の名前を書いた一銭五厘りんの葉書をタツター

枚奮発しさえすれば、一週間経たない中に、お前の首に縄が巻き付くぐらいのことは最早、もはや毒婦のお前にはわかり過ぎる位わかっているだろう』……まあ。脅迫してんのよ。この男の方が、よっぽど悪党だわ。ねえ……」

「……………」

「……きつと脅迫してお金にしようと思っているのよ、この男は……『けれども俺は、お前の今の仕事の邪魔をしようと思つてゐるのじゃないから安心しろ。その代りにこの手紙を見た瞬間からお前が、俺の命令に絶対に服従しなければならぬことだけは、もうトツクに覚悟しているだろう。一銭五厘のねうちが、どんなに恐ろしいものか、知り過ぎるくらい、知っているだろう。そうし

て俺の眼が、夜も昼も、お前の身のまわりに光っていることだけは感じているだろう』……」

ここまで読んで来ると流石にマダム童子の聲が、怪しく震えを帯びて来た。しかしマダムの童子は何気なく咳せきばら払いをして、いかにも平気らしく先の方を読みつづけた。

玲子はその声に耳を澄ましているうちに、いつの間にか氷のような冷静さに帰っていた。春の夜の明け方の静けさにみちみちた大沢邸内のどこかに、微かすかに微かに人間が忍び込んで来る音が聞えるように思つて一心に耳を澄ましながら、心の奥底を微かに微おのかに戦かしていた。

しかし手紙の方に気を取られていた大沢童子はソナナことに気

がつかないらしく、なおも平気な声をよそおいながら、玲子に聞えよがしに手紙の文句を読み続けて行つた。

「『俺はお前に命令する。お前の家の金庫を開く暗号は、お前が知つている筈だ。お前はこの二三日の中にお前の家と、お前自身の全財産を現金に換えてしまえ。そうしてその仕事が済んだら、お前の寝室に青でも赤でもいいから色の変つた電燈を点ける。俺が直ぐに迎えに行く。犬は殺しておく方がいい。女中と、この手紙を持って行く娘は麻醉薬か何かで眠らせておけ。麻醉薬がなければ夕食後に殺しておいてもいい。後は俺が引受ける。絶対に誰にもわからない、お前にも決して面倒をかけない方法で片付けてやる。心配するな』……」

「……………」

「ああ。やっとわかったわ。ねえ玲子さん。この男はこの根高弓子の財産を横取りしてから、弓子を殺して高飛びするつもりよ。トテモ恐ろしい悪党よこの男は……呆れた……『念のために言っておくが、お前は今の娘の家庭教師の何とかいう若い大学生に惚れているようだ。お前が主人の留守中にあの大学生に何かイヤらしいことを言ったので、あの大学生が、お前の家うちに足踏みをしなくなつたことも俺はチャンと知っている。それが今のところでは俺の一番の気がかりになつてゐる。万一お前が、あの大学生に引かされてこの計画を遣やりそこ損そこなうようなことがあつたら、俺はあの大学生とお前を縛つて、お前の家うちの裏庭の古井戸に生きながら投

げ込む準備をしていることを忘れるな。

お前のこれからの一生涯の幸福は、お前の財産全部を持って俺と一いっしょ所に外国に逃げることだ。その準備もちやんと出来ていることを忘れるな。……お前の昔の夫より……根高弓子どの』……ほほほほほ……玲子さん！」

いつの間にかほかのことばかり……中林先生のことばかり一心に考えていた玲子はビクツとして顔から手を離した。シャンデリアの下に美しく微笑んでいるマダム竜子の顔を見上げた。

「おまえこの手紙を通りがかりの人から言ことづかったの……」  
玲子は黙ってうなずいた。

「どんな人だったの……」



母親の顔が今までに一度もないくらい優しい、柔和な、親切にみちみちた顔だったので、玲子は思わずホッとタメ息を吐いた。

「……あの……ルンペンみたいな人……」

「いくつぐらいの人だったの」

「……あの……よくわかりませんでしたけど、四十か五十くらいの髯<sup>ひげ</sup>をボオボオと生やした怖い顔の人……」

「ホホホホ。まあ呆れた人ねえ玲子さんは……あなたはねえ。きつと雑誌の小説ばかり読んでいるお蔭で、あたまが変テコになつていんのよ。だからコンナ手紙を貰うと、すぐに探偵小説みたいなことを考えて、夜中に起きたり何かして心配すんのよ」

「……………」

「この手紙はねえ。玲子さん。このごろ流行る<sup>はや</sup>幸運の手紙とおんなじに誰か物好きな人間がイタズラをするために出したもののなよ。その証拠にウチの大沢という名字がどこにも書いてないじゃないの。大抵のうちに当てはまるように書いてあるじゃないの。東京の郊外で主人が留守勝<sup>がち</sup>で、奥さんが後妻で、娘があつて、犬が飼つてある家<sup>うち</sup>だつたら、そこいらにイクラでもある筈なんですからね。そんな家<sup>うち</sup>の娘にこの手紙をことづけて、中味を娘に知らしたら家庭悲劇を起させるくらい何でもないのですからね。そうしてその娘が本気に母親の悪いことを信じて、家<sup>うち</sup>を飛び出すか何かしたら、この手紙を出した悪<sup>いたずら</sup>戯の目的が達するのよ。この頃はソナ悪戯を道楽にする人間がチヨイチヨイ方々に出て来るの

よ。……ことによるとこれはソナ風にして玲子さんを欺して家を飛び出さして、どこかへ親切ごかしに誘拐するつもりで出した手紙かも知れないね。そうして玲子さんはもう半分がトコ欺されていたのかも知れないわ。ねえ玲子さん……そうじゃない……ホホ」

「……………」

「お母さんがいなかったら玲子さんは大変なことを仕出かして終うところだったかも知れないわ。……お母さんは玲子さんよりも年上です。玲子さんよりもズツとよく世間を知っているのですからね。こんな馬鹿な脅迫状にひっかかるような意気地のない、馬鹿な女じゃないのですからね。きょうにも夜が明けたら警視庁へ

電話をかけて、この手紙のことを知らせれば直ぐにこの字を書いた本人が捕まるのですからね。そうしたらその男の正体がわかるでしょう。あたしが、そんな根高弓子なんていう女とは似ても似つかない女であることがハッキリするでしょう。……わかつて玲子さん……」

玲子は眼をパチパチさせながら半分無意識にうなずいた。それでも何だか急に淋しくて、悲しくなつて来たようなので、両手を顔に当ててシクシクと泣き出した。マダムの竜子はその背中を優しく撫でてやった。

「泣くことなんかチツトモないわよ。玲子さん。あなたはこの手紙の中味を盗み読みしたり、先生に話したりはしないでしょね」

玲子はお河童かっぱさんの頭を烈しく左右に振った。ブルブルツと身ぶるいするかのように……そうして急に恐ろしくなつて来たために、泣声も出ないくらい息苦しくなつて来た。

「ホホホ。意気地がないのねえ。あんまりアナタが神経過敏すぎるからよ。……ね。玲子さん……よござんすか。よしんばこの手紙が全部ほんとうで、お母さんが根高弓子という恐ろしい毒婦だつたとしても、あなたはチツトモ心配することはないのですよ。あたしの戸籍はチャントしていて、正しいアナタのお母さんに違いないのですからね。こんなケチなユスリにかかつてビクビクするような子爵夫人じゃないんですからね。チエツ。馬鹿にしてるわよ。ホントニ……」

マダム竜子のこうした言葉尻は、貴夫人に似合わない下品な、毒々しい調子であつた。玲子も両手を顔に当てたままビクツとした位であつたが、竜子は直ぐに言葉を柔らげて今一度、玲子の背中を撫でてやつた。

「サアサア玲子さん。モウじきに夜が明けますからね。早くおやすみなさい。明日は日曜あしたですからユツクリと寝んねして、眼が醒めたら、あなたのお好きな中林先生の処へ遊びに行つていらつしやい。……ね……そうして先生に今一度あなたに教えに来て下さるようにアナタから頼んでいらつしやい。ね。ね。……さあさあ。それを楽しみにしてお寝やすみなさい。寝間着一つで風邪を引きますよ。サアサア。もう何も心配なことはないのですから……」

玲子は思いがけなく変った母親の、親切この上もない態度に絆ほだされたらしく、なおもシクシク泣き続けていたが、その中うちにヤツトの思いで立上った。涙を拭き拭き、

「おやすみなさい」

と言つて顔を上げたが、その時にはもうマダム竜子は寢室に入つたらしく、入口のカーテンが微かに揺らぎ残っているだけであつた。

玲子はまた急に悲しくなりながら、サルーンの電燈を消して、ギシギシと鳴る階段を手探りの足探りにして三階の方へ上つて行つた。

それから何分か、何十分か……ホンノちよつとばかり三階の寝床の中でウトウトしたと思ううちに突然、下の二階あたりから消<sup>け</sup>魂<sup>たま</sup>しい物音が聞こえて来たので、玲子はフツと眼を見開いた。睡<sup>ね</sup>むいのを我慢しながらモウ青白く夜の明けている狭い梯子段を伝い降りて、母親の寝室のカーテンの中へ走り込んで行った。もしや……と胸を轟<sup>とどろ</sup>かしながら……母親を気づかないながら……。

けれども玲子は寝室の中へ一步を踏み入れかけると同時にハツと立止まった。寝室の中の光景を一目見ると、入口の柱に獅<sup>し</sup>噛<sup>が</sup>みついてガタガタと震え出したのであった。

ツイ今しがたまでピンピンしていたマダムの竜子が、派手な寝間着のまま、寝台から床の上に引きずり卸<sup>おろ</sup>されて、髪を振り乱し



たまま仰向けさまの大の字になって横わっている。その左の胸に血だらけになった白鞞しらびやのヒ首あいくちが一本、深々と刺さっている。その屍体の背中の下から黒い血がムルムルと流れ出して高価な露シミア西亜絨氈の花模様の上を浸み込んで流れては浸み込みし  
て大きな花ビラのように拡がってゆく。

そのほかには誰も居ない。

玲子はもうハアハアと息を切らして眼が眩くらんだようになっていた。髪の毛が一本一本に逆立って、身体中からだがガタガタと音を立てそうになるのをジツと我慢しながら、その惨死体がたしかに母親の竜子に違いないことを見定めると、玲子は思わずハツと飛上った。

「お母さまッ……」

と叫んで走り寄って、血だらけの胸に縋すがりついてワツとばかりに泣き伏した……。

……と思ったがかの時遅くこの時早く、玲子はその屍体の一歩手前で、背後からシツカリと抱き止められていた。

そう気がついた玲子は、全身の血が一時にピッタリと冷え凍つたように思った。抱き止められたまま、またも石のように固くなって、手足を縮み込ませていた。その時に背後から抱き止めた人が声をかけた。それは静かな優しい声であった。

「玲子さん。屍体に触っちゃいけません。もうジキ警察の人が来ますから……」

「アラツ……中林先生……」

そう叫ぶと同時に玲子は緩んだ中林先生の腕の中でクルリと向き直って制服姿の胸に顔を埋めた。シツカリと縋りついたままワツとばかりに泣き出した。

中林先生は、その逞ましい腕に、泣いている玲子を軽々と抱き上げるようにして、サルーンへ連れて来た。そのロココ式の長椅子の上に腰を卸して、泣き沈んでいる玲子のお河童かっぱさんを慰めるように撫でまわしてやった。そうして古びたネル一枚の見すばらしい寝巻姿に包まれた瘠せ枯れている玲子の手足を見まわすと、その男らしい切れ目の長い眼に涙を一パイに浮かめた。汗まみれになった自分の髪毛を房々に撫で上げながら、赤ちゃんをあやす

ように言つて聞かせた。

「可哀そうに……苦勞させましたね、玲子さん……」

玲子は中林先生の肩に縋りながら一層烈しく泣き出した。

「玲子さん……僕は今のお母さんが初めてこの家うちに来られた時からこの女ひとはイケナイ人だ……玲子さんのためにならない人だということを看破みやぶつていたのです。ですからこの家うちに来るのをやめて、あの女のすることを眼も離さずに見張つていたのです。玲子さんにも早く打ち明けようと思つていたのですが、玲子さんは頭はステキにいいんですけども心がトテモ正直ですから、もし僕が、あの女を疑つていることが、玲子さんを通じてあの女にわかつて用心させるといけないと思ひましたから、わざと黙つていて、あの

女が玲子さんをイジメるのを知らん顔して見ていたのです。あなたも辛かったでしょう。しかし僕も辛かったですよ。ほんとにほんとにすみませんでした」

「イイエイエ。先生。先生を怨む気持なんか……あたし……あたし……」

「まあまあ落ちついて聞いて下さい。あなたが、それでもあの女をホントの母親のように思っただけから慕い、敬っていられるのを見て、僕がドンナに感心したことか……そうしてドンナに心配したことか……ね。玲子さん。わかって下さるでしょう、僕の心持は……」

「ええ。ええ。あたし先生ばかりを、おたよりに……」

「そればかりじゃありません。毎日のようにお講義を聞いている大沢先生が日に増しお顔色が悪くなつてゆかれるのに気がついた僕がどんなに気を揉んだことか……大沢先生は世界に知られていゝる鳥の学者ですからね。いつまでもいつまでも生きていて頂かなければならぬ日本の国宝ともいふべき貴い方ですからね……それで思い切つてある日のこと大沢先生にお眼にかかつて聞いてみると、大沢先生が御自分はお気づきにならないまんまにあるの女から毒殺されかけておいでになることが、僕にハッキリとわかつたのです。大沢先生は去年の秋口のある晩のこと、蒲団が薄かつたので鼻風邪を引かれたのです。それで鼻が詰まつてしまつてアンマリ不愉快なので学校を休もうかと思つていられるところ

へ、あの女がすすめてコカインの霧吹器スプレーで先生の鼻の穴を吹いて  
上げると瞬く間に鼻がスツと透つて、頭がハッキリして来ました  
ので、先生は大喜びで、そのスプレーをポケットに入れて学校に  
来られました。そうしてソレ以来、風邪を引かれなくとも頭をハ  
ッキリさせるために彼女の調合したコカインとアドレナレンのス  
プレーで鼻の穴をプープー吹かれるようになって、とうとう本物  
のコカイン中毒になられたのです。しかもそのコカインの分量を  
あの女がグングン強めて行つたのに違いありません。そうして大  
沢先生の心臓をグングン弱めて行つたに違いないのです。あの女  
は現在横浜の西洋人のお医者者を情夫に持っているのですからね。  
そこから密輸入のコカインを自由自在に手に入れてるに違いあ

りません。そうして最後には何かモット強い……たとえば青酸加里か何かをスプレーの薬に使って、コカイン中毒で死なれたように見せかけるつもりだったのでしよう。トテモ怖ろしい女だったのですよ。アレは……ね。そうでしょう玲子さん」

玲子は眼を大きく大きく見開いて中林先生の顔を見上げて呼吸も吐けないでいた。その顔を見下しながら中林先生はニツコリと笑った。

「ところが悪いことは出来ないものです。それ以来、僕が毎日毎日あの女の行く先を探っている中に、あの女のアトを僕と同じように跟けまわしている一人のルンペンみたような男がいるのに気がつきました。そうしてツイこの四五日前のことです。そのルン



ペンがある酒場で酔っ払った時に……俺はモウ近い中<sup>うち</sup>に大金持になるんだぞ……と口走るのを聞きましたから、僕はハツとしました。イヨイヨ危ないナ……と思いましたが直ぐに大沢先生に何もかも打明けて、家を出て行<sup>うち</sup>って頂いたのです。心臓がもうかなり弱<sup>ち</sup>っていられるのを無理にそうして頂いたのです」

何もかも忘れて聞き惚<sup>と</sup>れていた玲子はハツと気がついて、心からうなずいた。

中林先生の深い深い親切と智慧に、驚いて、感心してしまいがら、その乱れた髪<sup>かみ</sup>毛の下に光る凜<sup>り</sup>々しい瞳の光りを見上げていた。

「けれども玲子さん。お父さんのことは心配しなくともいいです。

大沢先生が信州へ行かれたのは嘘なのです。先生は今東京の大学病院に這入ってコカイン中毒の治療をしておられるのですよ。そのうちに元気になって帰っておいでになるでしょう」

「まあッ……ホント……」

玲子は思わず中林先生の肩にかじりついた。その襟筋に熱い熱い感謝の涙を落しかけた。

中林先生も声をうるませた。

「ほんとうですともほんとうですとも。僕が附添って入院させたのですから。そうして何もかもお話しておいたのですから御心配に及びません。その時に何もかもおわかりになった大沢先生は僕の手を握って、玲子のことを頼む頼むと何度も言われましたから、

僕も一生懸命になつて気をつけているところへ、思いがけない昨日のうのお手紙でしょう。あの悪党女が、お父さんのお留守を利用して、自分一人だけでお金を盗んで逃げようとしているのを感じていた、もう一人の男の悪党が横合いから飛込んで、そのお金をあの女ごと引たくろうとしているのです……そのためにはドンナ恐ろしい犠牲を払つてもいい覚悟をしているらしい。一刻も猶予しないつもりらしいことがわかりましたから、僕は直ぐにこの家うちに忍び込んで、どんなことが起るか待ち構えていたのです。それを知らずにあの男は、お父さんのお留守を幸いに忍び込んで、あの女を脅迫しようと思つたのでしよう。短刀を持って拔足、さし足この段々の下まで来ると、ちょうどその時にこのサロンであの

女と玲子さんとの問答が初まったのです。そうしてあの手紙をあの女が読み初めたのです」

玲子は恐ろしかったその時のことを思い出して今更のようにか身体を縮めた。

「あの時のあの女の度胸のよかったこと……あんなにも恐ろしい手紙を読みながら平氣の平左で、即座に玲子さんを欺して、この僕をオビキ寄せさせようとした、あの智慧の物すごかったこと……僕はあのルンペン男の背後に隠れて聞きながらゾツとしてしまいましたよ」

と言いさして中林先生はホツとふるえたタメ息をした。玲子もまたガタガタふるえ出しそうになったのを中林先生の腕に縋って

やつと我慢した。

「けれどもあの時にあの女がアノ手紙を読んだり、その文句を冷やかしたりさえしなければ、あの女は殺されなくともよかつたのでしよう。『雉きじも啼かすば撃たれまいに……』という諺ことわざの通りであの女は命を取られる運命を自分で招きよせたのでした。……あの手紙を読んでいる中うちにあの女が、あの女の前の夫を馬鹿にしている。自分を怨んでいる前の夫の脱獄囚を嘲あざわら笑い振り棄てて自分一人でうまいことをして逃げようとしている。うっかりすると又、警察へ密告する気かも知れない……と気がついたのであるのはカアツとなつてしまったのでしよう。玲子さんが三階へ上ると間もなくあの女の寢室へ忍び込んで、何をするかと思ううちに、

一気に刺殺<sup>さしころ</sup>してしまつたのです。つまり天罰を下したつもりなのですね。ですから僕は直ぐにあの男の背後から近付いて不意打ちの当て身を一つ喰わして電気炬燵<sup>こたつ</sup>のコードでしっかりと縛つて、あの寢室の隣りの標本室の大机の足にしっかりと縛りつけて、外から鍵を掛けておいたのです。あの大机の上には鳥の剥製を作る硝子<sup>ガラス</sup>の道具や、劇薬毒薬の瓶を山のように積み上げておきましたから、あの男は息を吹き返しても身動き一つ出来ないでしょう。……そのほかのものは殺人の現場の塵一本、動かしてないのでから、今にも警察の人が来て調べたら何もかもホントウのことがわかるでしょう。ただ一つ惜しいことにあの手紙は焼き棄ててしまつてあるようですが、しかし中味の文句は僕がハッキリ記憶<sup>おぼ</sup>え

ておりますから大丈夫です。玲子さんも記憶おぼえているでしょうね」  
玲子は唇の色までなくしたまま中林先生の顔を見上げてうなずいた。

中林先生も一層、微笑を深めてうなずいた。

「それならばイヨイヨ大丈夫です。……何なら警察の人が来る前に今一度あのルンペン男の顔を見ておいてくれませんか。昨日きのうの昼間あなたに手紙を渡した男に相違ないかどうか……」

しかし玲子はうなずかなかつた。フト……たまらないほど心配なことを思い出したので、そのままスリと中林先生の腕を抜けて一散に階下へ走り降りて行った。廊下の切戸まを開く間も遅くお庭へ降りる石段の上に出ると、折から向うの木立ちを離れた太陽

の光りに、マトモに射すくめられてしまった。同時に、大きな黒いものが真正面から玲子に飛びついて、彼女の涙だらけの顔をペロペロと嘗めまわした。

「おお。アムールや。よくまあ無事でいてくれたのね」



# 青空文庫情報

底本：「夢野久作全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年10月22日第1刷発行

入力：柴田卓治

校正：mineko

2000年12月29日公開

2006年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

# 継子

夢野久作

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>